

毎月1回1日発行

# 予告号

# 能 樂 の 友

発行 能 樂 の 友 社  
名古屋市中区栄二丁目16

後藤新蔵  
後藤新蔵  
西村欽也  
井上松次郎

弱法師 西村欽也  
十九日(土) 正午始  
霞会囃子

十二月十一日(日)  
午前九時始  
名古屋千種区本山町  
柴田舞台

ほどころの名を冠せられてい  
る。  
この名古屋で、今夏はじめ  
て「新能」が催され、「市民

## ほどころ中部文化圏

### 「能樂の友」誕生

#### 伝統美の発展を期して

「青年都市」という名を冠せられていた名古屋は、いまや中部経済圏のセンターとして、わが国屈指のマンモス商業地帯の中心地区となりつつあります。  
産業面の成長とともに、文化面においても、そのスケールは飛躍的に拡大しており、能樂界においても決して例外ではなく同好の士のいちじるしい増加はまことに力強いものがある。  
とくに古典芸術の極致といわれながら、難かしいもの、判らないものとの考えがごく当り前としておとってきた能樂が日本全国で約三百万を数える愛好者をもつということ、は大きな意義をもっている。演劇はそれを生み出した園または民族の、文化のバロメーターである。そしてひろく



写真説明 翁 日光 作

深い文化の沃土をもたなければ、芽生え、成長することはできない。総合芸術の能樂の歴史が古いにもかかわらず、かつ伝承がきわめて困難な芸術といわれながら、その形式を保ち、隆昌をつづけている力こそ、能樂のもつ「深遠」と「伝統」と「人間性」ではなかるうか。乱世の芸術であり、平和の芸術である能樂は、星霜六百年の間には戦争と平和の中で鍛え練りあげられたものをもっている。  
名古屋を中心とする中部の文化の土地柄は、つとにつちかわれている。尾張から興った織田信長、豊臣秀吉の安土・桃山時代の文化の高揚、さらに徳川時代には親藩中、第一の雄藩という背景があり、江戸・京都を結ぶ東海道の大動脈として文化の花を咲かせ、

### 編集内容紹介

- 「催能のしおり」  
毎号にわたり、その月に熱田神宮能樂殿での催能をもれなく報道し、また解説を加え主催する会の紹介、みどころなどをお知らせする鑑賞のガイドです。
- 「演能案内」  
第一面、第二面の下段の「演能案内」は、近く行なわれる能の告知欄として期待される催能予定を掲載。愛好者の鑑賞スケジュールの便をはかります。  
演能のお知らせは、名古屋にかぎらず全国各地の案内も行ないます。
- 「解説」「評論」  
各能楽師、能楽評論家等のご寄稿により、能、狂言の解説や評論を掲載して能樂界の話題について、愛好家とともに、考え、学び、研究するテーマを選びます。  
●「各地だより」  
東京、大阪、京都、神戸、

「能樂の友」は芸術愛好の方々のフレンドとして、気軽に能樂鑑賞、入門、研究の手引きとなるべくニュースはもろろん、解説、催能案内、評論、隨筆、各地だより、またとくに名古屋をはじめ中部地区をテーマとする「能樂郷土史」などを連載し充実した多彩な記事でお目見得する予定です。  
主な内容はつぎのとおりです。

月刊4頁建て  
☆ 発 刊 案 内 ☆  
「能樂の友」は毎月一日定期刊。大ききタブロイド版四頁建て。編集内容は別項のとおり。編集は、能樂の友社同人。  
講読料 一年二百円。  
(郵送の場合は) 一年三百八十円。  
一部二百円の予定であります。

『能樂の友』創刊号  
新春1月1日に発行  
ご期待を乞う  
なお、12月1日付で予告第2号を発行いたします。

<p>十一月十三日(日) 午前九時半始 名古屋淡交会 神歌 尾関健太郎 鬼頭五朗 谷本正証 岡田頼允 弓八幡 高安滋郎 安宅 佐野正俊 佐藤正明 遊行柳 丹波弥元 鬼頭八郎 弱法師 伊藤長八 西村欽也</p>	<p>十一月二十日(日) 正午始 名古屋観世会定式能 増田一雄 通小町 鬼頭五朗 六車真三 花月 大槻秀夫 西村弘敬 野宮 観世寿夫 高安滋郎 阿漕 梅若六郎 西村欽也</p>	<p>十二月六日(日) 午前十時開演 九阜会秋季大会 加藤正光 観世武雄 植村真太郎 清 高安滋郎 願書 伊藤次郎 左衛門 後藤新蔵 後藤新蔵 後藤新蔵 西村欽也 井上松次郎 文荷 佐藤卯三郎 佐藤秀雄 田中きん 観世喜之 通小町 西村弘敬 雨夜の伝</p>
--	--	---

「能樂の友」は毎月一日定期刊。大ききタブロイド版四頁建て。編集内容は別項のとおり。編集は、能樂の友社同人。  
講読料 一年二百円。  
(郵送の場合は) 一年三百八十円。  
一部二百円の予定であります。

# 10月の 催能のしおり

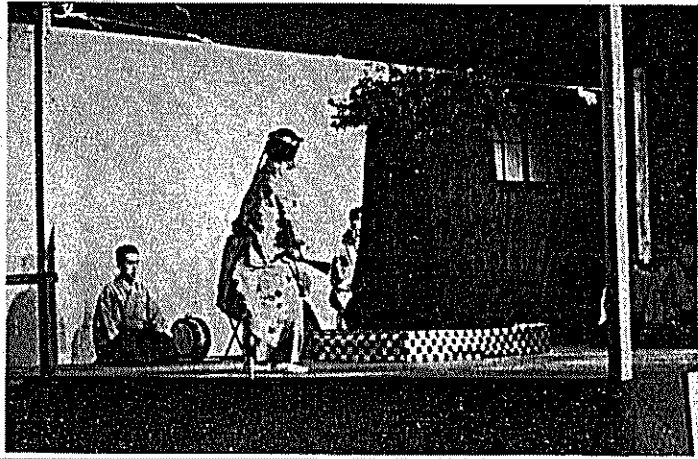
熱田神宮能楽殿

一日(日) 午前九時始  
杉村竹韻会三十五年記  
念能楽大会

増田保雄  
杉村竹韻  
蟬丸 西村欽也

神歌  
野口清 千戸松六雄

本多逸郎  
大西通八郎  
千戸松六雄



狩 葉 紅 能 新 [解説]

**(能) (楽) (随) (談)**  
能と茶——この似つかわし  
くない二つは、その生い立ち  
から精神において、はなはだ  
しく相似かよっているのに興  
味を惹かれる。  
茶道の精神は、利久のとな  
えた「和敬清寂」に要約され  
る「わび」「さび」「渋み」  
の境地に悟入するのが最大の  
目的である。茶室という一定  
の場において数人の同好者が  
一定の法式、進退作法によつ  
て茶を点て喫する「演出の芸

術」ともいえる。茶室の中の  
諸道具(茶釜、茶碗、茶入、  
茶掛け、花入  
等)は小道具  
背景にあたり  
それらの調和  
の中に、一坐  
の人々が私心  
を去って同体になり、一つの  
冥契にひたり、幽玄の茶を  
探求するのにつとめる。また  
茶道は宗教的境地でもあるの  
で「茶禅一味」ということが  
いわれ「茶碗を公案に、茶室  
を禅堂に比し、物心一如の世

界に入るべく茶の修業につと  
め雑念を去って茶の「三昧境」  
に入ることが要請されてい  
る。  
さび、わび、幽玄等のあら  
われた中世紀の和歌は茶人に  
とって茶道の精神をあらわす

## 能 と 茶

### 神男女狂鬼

ものと考えられていた。たと  
えば利久は「花をのみ待つ  
らん人に山里の雪間の草の春  
を見せばや」(家隆)の歌を  
愛唱したことも知られ、さ  
らに具体的に和歌とも結びつ  
き、茶の道具にも多く見られ

このことは能についても同  
じことがいえる。社会の秩序  
が戦乱によって非常に乱れて  
いたので、それを正すための  
公家、僧侶、  
武士の間に復  
活して流行を  
見るに至ったが、茶道の流行  
は政治史からみるとまさに日  
本の乱世に当たっている。

能は、幽玄の情趣を生命と  
するものであるから、舞、歌  
を本体とする整物も、物真似  
るに過ぎない。

社交芸術が必然的に要求され  
たのである。毎日を政争と戦  
闘に明け暮れたとはいえ、彼  
等が人間であるかぎり、遊樂  
と趣味、平和と道徳を渴望し  
たのは当然であろう。そもそ  
も茶道は、能阿弥(のうあみ)  
が足利八代將軍義政の命をう  
けて、殿中の茶儀を制定した  
が、珠光はそれをさらに庶民  
向きに改良して提唱し、桃山  
時代豊臣秀吉の庇護によって  
利久が今日の茶道を大成する  
にいたったのは、よく知られ  
ているところである。

ひるがえって能をみてみよ  
う。  
能は、幽玄の情趣を生命と  
するものであるから、舞、歌  
を本体とする整物も、物真似  
るに過ぎない。

るのでもそれが知られる。  
そもそも茶道は室町時代か  
ら桃山時代にかけて完成し  
た。奈良朝時代から茶を飲む  
習慣はあり、平安朝にも儒家  
文人の間に行なわれ一時衰え  
たが、鎌倉時代に宋、元の文  
化が輸入され  
禅宗が普及す  
るにおよんで  
公家、僧侶、  
武士の間に復  
活して流行を  
見るに至ったが、茶道の流行  
は政治史からみるとまさに日  
本の乱世に当たっている。

このことは能についても同  
じことがいえる。社会の秩序  
が戦乱によって非常に乱れて  
いたので、それを正すための  
公家、僧侶、  
武士の間に復  
活して流行を  
見るに至ったが、茶道の流行  
は政治史からみるとまさに日  
本の乱世に当たっている。

能は、幽玄の情趣を生命と  
するものであるから、舞、歌  
を本体とする整物も、物真似  
るに過ぎない。

能は、幽玄の情趣を生命と  
するものであるから、舞、歌  
を本体とする整物も、物真似  
るに過ぎない。

能は、幽玄の情趣を生命と  
するものであるから、舞、歌  
を本体とする整物も、物真似  
るに過ぎない。

能は、幽玄の情趣を生命と  
するものであるから、舞、歌  
を本体とする整物も、物真似  
るに過ぎない。

望 月 宝生九郎 高安澄郎 佐藤卯三郎  
鉢 木 高安澄郎 井上義次  
安宅 小林二郎  
恒川松彦  
恋重荷 森とみ子 松本頭一  
増田保雄

秋の邦謡会 梅田社中  
十日(祭) 午前九時始  
伯母ヶ酒 井上祐一 井上松次郎  
前田茂穂 核馬龍馬 西村欽也  
双之舞  
乱 西村欽也  
内藤泰二 辰巳孝  
和合 西村弘敬  
野口緑久 西村欽也  
羽衣 西村欽也  
瘦松 井上松次郎 井上礼之助  
子方山田治民 倉本雅

三井寺 大江又三郎 田鍋惣太郎  
観世武雄 観世喜之  
松風 福王茂十郎  
見留 佐々木千吉  
三人片輪 茂山千作 茂山正義 佐々木千吉  
梅若六郎 福王茂十郎  
思立之出 クツロギ 夜山千五郎

三十日(日) 正午始  
青陽会 井上義次  
佐藤太俊 高安澄郎 佐藤友彦  
屋島 高安澄郎  
橋岡久共 西村弘敬 佐藤秀雄  
井筒 西村弘敬  
栗焼 佐藤卯三郎 井上松次郎  
加藤太太郎 西村欽也  
紅葉狩 西村欽也

十月九日(日) 於河村舞台  
有賀社中囃子会  
十月十六日(日) 於半田市  
稻生社中の会

十一月二十三日(祭) 午前十時始  
故二十四世観世左近  
追善能  
神歌 鬼頭五朗 林甲子夫  
法会之式  
繪馬 柴田初太郎 武田太加志 大槻秀夫  
吉田隆 観世元昭 森茂好  
安宅 森茂好  
勸進帳 延年之舞  
貝立 井上松次郎  
宗八 和泉保之 野村又三郎 井上礼之助  
観世喜之 片山博太郎 杉福元三郎 観世元正  
大原御幸 西村欽也 高安澄郎 和泉昭太郎 立石啓雄 高安勝久 河村丘造  
胡蝶 山本博之 観世元信  
観世鏡之丞 森茂好  
思立之出 白式舞動之伝 佐藤秀雄



お知らせ  
能楽の友社  
ではこの「催  
能のしおり」  
欄で、当月の  
能楽殿での催  
能は勿論、各  
社中の会にお  
知らせを致し  
ますから能楽  
の友社にお知  
らせ下さい。  
(係より)  
台の上のカットは  
伊勢岡水氏の執  
筆です。

を主とする現在物もすべて表  
現を節約簡素化する。そうし  
てこの簡素化は能の総ての面  
に施されているから、写実的  
な演劇にくらべると、能はか  
なり退屈なものである。しか  
し簡素化といっても、それは  
強烈な力を傾け注いだもので  
あるから、それによって観客  
は驚くべき迫力を感ずるもの  
である。また曲によっては、  
これという要所に、あつとい  
わせるような美しい離れ業を  
することもあり、また早くて  
変化の多い働きをする場合に  
も、美しさを害わず、姿勢に  
崩れを見せないことが肝要と  
なっているのが現代の能のあ  
りかたである。(つづく)  
無断転載を禁じます

十月のラジオ案内  
NHK 第二放送  
▽二日(日) 午前八時 謡曲  
下懸室生流「藤戸」 松本謙  
三ほか  
▽九日(日) 午前八時 謡曲  
金春流「遊行柳」 金春信高  
▽十六日(日) 午前八時 謡  
曲 観世流「小鍛冶」 橋岡  
久馬・喜多流「籠太鼓」 栗  
治郎

十一月二十七日(日)  
柳水会  
服部紗枝 高安澄郎  
班女 西村欽也 井上松次郎  
繪馬 植村真太郎 植村 稔  
大野美津子  
他に囃子数番あり。

予告第2号

「能樂の友」創刊号  
新春1月1日に発行  
ご期待を乞う

能樂の友

＝毎月1回1日発行＝

発行 能樂の友社  
名古屋市中区栄二丁目16-10

題字は熱田神宮 篠田宮司 筆

(鏡) 翁 (和) 三番叟  
(高) 高砂  
(宝) 羽衣  
(宝) 鶴亀  
(宝) 胡蝶  
(宝) 狸々

田鍋惣一郎師宅  
打初め式  
一月二十一日(土)  
河村舞台

金沢能楽会  
定例研究発表会  
一月五日(木)午後五時始  
金沢能楽堂

文相撲 殿村与作  
フシ 野辺容之助  
シラ 宮野五朗  
巻 絹 ヲ 泉 喜八

小書について  
能楽(または狂言)における特殊演出法であり、いずれにしても各流派によって変わり、新様式をのみ出し、それ

各界に高まる期待の声

「能樂の友」新春発刊

芸能界の注目を浴びて

芸どころ中部文化圏に、中部の能楽界の機関紙として、また能楽ファンの愛読紙として、斯界の発展をめざし、いよいよ新春発刊されることになった「能樂の友」は、予告号が出されて、能楽界はもろろん、芸能界に大きな反響を

愛好者とともに進む  
編集内容紹介

◎「催能のしおり」  
毎号にわたり、その月に熱田神宮能楽殿での催能をもれなく報道し、また解説を加え主催する会の紹介、みどころなどをお知らせする鑑賞のガイドです。



解説 「安宅」スケッチ (二井栄逸の作)

◎「解説」「評論」

各能楽師範、能楽評論家等のご寄稿により、能、狂言の解説や評論を掲載して能楽界の話題について、愛好者とともに、考え、学び、研究するテーマを選びます。

◎「各地だより」

東京、大阪、京都、神戸、金沢などの能楽協会本部、各

◎「能楽郷土史」

伝統をもつ能楽界の風土記というべき連載物、ならびに今日を築いた能楽界のあゆみを、シテ方、ワキ方、囃子方狂言方、各流派の長老が語る「能楽郷土史」は初めて公開される秘話もまじえて、ユニークなシリーズとします。

◎「けいこ場のぞ記」

各会のけいこ場を訪問し、上達の道はけいこあるのみと修業に励む門下の方々の姿をとらえる予定であります。

海外に能・狂言進出

◇ インドのニューデリーで世界演劇大会が開催され、日本から狂言の野村万造、野村悟作、野村又三郎の各氏が能狂言の真価を紹介するため十月二十二日羽田を発ち渡印、同月末滞留されました。

◇ 宝生英雄師が東欧諸国で演能していられます。

◇ 来年のカナダ世界博覧会の展示の一つとして製作されているカナダ国立映画局の「迷宮(人間とその世界)」に梅若六郎師の「葵上」が挿入されました。

◇ スエーデンの国立テレビ局に提供する短編映画の中に観

お知らせ

演能案内の会員券のお問い合わせは、熱田神宮能楽殿(電話六七一一二九二番)におねがい致します。

月刊4頁建て

☆ 発刊案内 ☆

「能樂の友」は毎月一日定期刊。大ききタブロイド版四頁建て。編集内容は別項のとおり。編集は、能樂の友社同人。講読料 一年二百円。(郵送の場合は一年三百八十円) 一部二千円の予定であります。本紙のご購読希望は、能樂師または熱田神宮能楽殿へお申し込み下さい。

世流高岡久馬師の能「嵐山」「班女」などの能が採り入れられました。

演能案内

十二月四日(日) 正午始

楽師会

乱能  
吉野天人 寛 鉦一 有賀 滋子 飯田 新子 服部 紗枝  
鬼頭 季信 長田 五朗 福井 啓次郎  
池田 茂 鬼頭 五朗 福井 啓次郎

蟹山伏 高安 滋郎 西村 弘敬  
小袖曾我 山本敬一郎 梅田 邦久 久田 秀雄  
船弁慶 河村総一郎 二井 榮逸 加藤 丈太郎 野崎 太郎

葵 田鍋惣一郎 和泉 保之 辰巳 孝  
上 藤田六郎兵衛 鈴木 一雄 佐藤 卯三郎  
山口 義郎 大森 英三郎

紅葉狩 助川 竜夫 河村 修二 塚本 秀雄  
引括 戸田 秀雄 吉田 俊太郎 佐藤 卯三郎  
猿々 佐藤 秀雄 青木 恒治 井上 松次郎 竹内 六郎

十二月十日(土) 午前九時半始  
名古屋修演会第一回大会  
班女 沢田 春子  
唐船 吉川 幸  
芦刈 佐藤 敏子

雲林院 伊藤 恵美 素謡及び仕舞 外数番あります。

宝生会 倉本 雅 吉田 定男 小島 鉄次郎  
源氏供養 高安 滋郎 後藤 孝一郎

飛越 佐藤 卯三郎 井上 礼之助  
野口 緑久 河村 総一郎 鬼頭 八郎  
阿漕 西村 欽也 藤田 六郎兵衛 井上 松次郎

(有 料)





〔写真説明〕 能 狸 々

### 11月の 催能のしおり

熱田神宮能楽殿

二日(水)午後五時半始  
名古屋市民芸術祭参加  
第六回 和泉会  
河村健三郎師二十七回忌追善 (有料)

三日(木)午前九時半始  
幸友会 囃子

六日(日)午前十時始  
九阜会秋季大会  
加藤正光 観世武雄  
植村真太郎 清 高安澄郎

願書 伊藤次郎左衛門  
後藤新蔵 後藤鈴子  
編 西村欽也  
巻 井上松次郎

文荷 佐藤卯三郎 佐藤秀雄  
井上礼之助  
田中きん 観世喜之  
通小町 西村弘敬  
雨夜の伝

十三日(日)午前九時半始  
名古屋淡交会  
神歌 尾関健太郎 鬼頭五朗  
谷本正証 岡田頼元  
弓八幡 高安澄郎  
安宅 佐野正俊 佐藤正明  
遊行柳 丹波弥元 鬼頭八郎  
弱法師 伊藤長八  
西村欽也

十九日(土)正午始  
霞会 囃子

二十日(日)正午始  
名古屋観世会定式能  
増田一雄  
通小町 鬼頭五朗 六車真三

花月 西村弘敬  
大槻秀夫  
野宮 高安澄郎  
梅若六郎  
阿漕 西村欽也 (有料)

二十三日(祭)午前十時始  
故二十四世観世左近 追善能  
神歌 鬼頭五朗 林甲子夫  
法会之式

絵馬 柴田初太郎 柴田太加志 大槻秀夫  
吉田隆 観世元昭  
安宅 森 茂好  
勤進帳 延年之舞 貝立  
井上礼之助 井上松次郎

宗八 和泉保之 井村又三郎  
観世喜之 片山博太郎 杉浦元三郎 観世元正  
大原御幸 西村欽也 高安澄郎 立石登雄 高安勝久 河村巨造

胡蝶 山本博之 観世元信  
観世鏡之丞 森 茂好  
融 思立之出 白式舞動之伝 佐藤秀雄 (有料)

二十六日(土)一謡会  
舞囃子数番あり。

二十七日(日)掬水会  
服部紗枝 高安澄郎 西村欽也 井上松次郎  
班女 西村欽也 井上松次郎  
絵馬 植村真太郎 植村 総 大野美津子  
他に囃子数番あり。

その他  
六日(日)午前九時三十分始  
岐阜幽謡会五周年記念会  
岐阜・万松館

十三日(日)此水会秋季謡会  
午前十時始

十七日(木)名古屋梅猶会  
午後五時半始  
丸栄カーネーションホール

十九日(土)名古屋梅猶会  
第三回素謡会  
中小企業センター

二十日(日)名大宝生流能楽大会  
午前九時三十分始  
名古屋・松岡旅館

金剛流春鶯会  
舞囃子数番あり。

十二月十一日(日)名古屋千種区本山町 柴田 舞台

黒田金蔵氏追福 竹韻会素謡会  
大西智恵子 角野志げ子 水野 三宅志づ 紅葉狩 安間昌子 恒川松彦 松田六郎 本多逸郎 瀬尾登三 角野博久 増田幸子 大西鑑八郎 滝川一司

定家 恒川志やう 丹下昌子 草加好子 花 華 巖坂 章 東北 加藤三奈 求 塚 宮部保良 番外仕舞 鶴 杉村竹翠

十二月十一日(日) 岡崎竜神会  
芦刈 ほか舞囃子数番あり。

ラジオ案内 (全国放送) NHK 第二放送

十一月  
六日(日)午前八時 謡曲 観世流「善知鳥」観世喜之ほか(東京)  
十三日(日)午前八時 謡曲 宝生流「俊寛」遠藤善作ほか(札幌)・「井筒」市村光子ほか(札幌)  
二十日(日)午前八時 謡曲 宝生流「正尊」大坪十喜雄ほか(東京)  
二十七日(日)午前八時 謡曲 観世流「清経」片山博太郎ほか(大阪)

十二月  
四日(日)午前八時 謡曲 観世流「正尊」清水要之助ほか(東京)・謡曲 金春流「源氏供養」桜間竜馬ほか(東京)  
十一日(日)午前八時 謡曲 喜多流「融」和島富太郎  
十四日(日)午前八時 謡曲 観世流「二人静」梅若六郎・梅若安弘  
二十日(日)午前八時 謡曲 大蔵流「葉争」茂山千五郎・茂山忠三郎・大蔵弥太郎

十一月三日(文化の日) NHK教育テレビ  
午前九時から十時まで 能 観世流「二人静」梅若六郎・梅若安弘  
ワキ 宝生弥一  
狂言 大蔵流「葉争」茂山千五郎・茂山忠三郎・大蔵弥太郎

能と茶  
能という呼称は、仏語に基ずくという説もあるが、それほど面倒なものでなく、芸能才能、能力などという「能」と同義であって、古くは猿楽の能、田楽の能、狂言の能な

能楽の「能」として、名古屋市の総鎮守、若宮八幡社境内で新明(タイムマツ)に映えた野天の催能は、能楽協会名古屋

者をつぶす必要が痛感されてきた。ここに発刊される「能楽の友」紙は、名古屋能楽協会の

四十二年一月七日(土) 午前九時半始  
第十一回「学生能と狂言の会」

参加校  
愛知教育大学 宝生流  
愛知県立女子大学 宝生流  
愛知大学 金春流  
岐阜女子短期大学 金剛流  
岐阜大学 宝生流

名城学院大学短期大学部宝生流  
南山学院大学 金剛流  
名古屋女子短期大学宝生流  
名古屋大学 観世流  
名古屋大学 宝生流  
南山大学 宝生流

四十二年一月十五日(祭) 午前十時始  
名古屋清韻会 能  
神歌 長屋 潤 長谷川 実  
大原御幸 下山 鋼一 里井順次郎 富士道周明

手方 中原 恋 赤間 鋼雄 西村 欽也 河村総一郎 鬼頭喜太郎 高安 澄郎 福井啓次郎 藤田 昭彦 高安 勝久 藤田 昭彦 佐藤 秀雄

班女 川村 鉄雄 西村 欽也 田鶴 一郎 藤田六郎兵衛 立石 登雄 佐藤 卯三郎

筑紫 奥 井上 祐一 井上松次郎  
川村 鉄雄 田鶴 一郎 藤田六郎兵衛 立石 登雄 佐藤 卯三郎

狸 稲生 芳雄 西村 弘敬 寛 鈺一 助川 逸夫 田鍋 洋一 小島 鉄次郎

外に舞囃子・仕舞・二調等数番あり。

九条道孝等六郎を発起人とし芝公園紅葉山に能楽社設立に際して重野安禪、久米邦武の両氏がこれを使ってからであるが、おそらく「雅楽」「舞楽」などという言葉から思いついたのであろうと思われ

無断転載を禁じます (つづく)

## 名古屋の中部文化圏

11月演能案内  
十一月六日(日)